

展覧会終了から

加藤文子

六月末から七月にかけて、さいたま市で展覧会をさせていただいた。はじまりと同時に思いもよらない猛暑に見舞われた。那須も一日を境にいきなり十度以上上昇し、三十度を超える日々が続いた。

会期は二週間、そのあいだ会場に出掛けることが多く、留守を守るアシスタントのYさんは盆栽の水やりに翻弄された。水やりを済ませて他の用事をしているうちに、あつという間に乾きはじめるものもある。前庭にあわてて寒冷紗を張ってみたものの、猛烈な暑さがもたらす乾きは常軌を逸していた。

展覧会のあと片づけやお礼状書きも終わり、早朝から庭をめぐる夏の毎日が始まる。暑さにへこたれず、植物観察とともに水やりを上手にこなし、体調が続くように工夫しながら草とりや庭を整える。炎天下棚上にいる盆栽たちを思うと、へ口へ口しているわけにはいかない。



蟻の活発な動きにも注意が要る。小さな盆栽の鉢中に巣をつくられては困るので、早期発見、大事に至る前に対処する。また室内で大量発生することもあるので、家の周りをパトロールして侵入を防ぐ。

朝から快晴、こんな日は盆栽の乾きが気になって家事をしながらも落ち着かず、台所の窓越しに外をうかがう。はやく区切りをつけて外に出なければ……と、気持ち^{はげ}が逸る。

朝の涼しい時間帯に読書する。そんなあこがれを持たないわけではないのだが、雨でも降らない限り難しい。

涼しさは貴重だ。暑さがおとずれる前に、できるだけ庭仕事をしたい。小鳥のさえずり、時おり頬をかすめる涼しい風を感じながら、心地よく庭で作業したい。

年を追うごとに体力は確実に衰えている。去年の夏の私ではないと実感する。

生まれつき足に問題もあるので、狭まってくる歩行の限界も痛感せずにはいられない。

だからこそ、今日を大切に有効な一日となるよう動いていたいと思う。

展覧会終了から十日あまり、普段人と会う機会が少ないせいか、いつもの自分に戻るのに時間が必要。まるで海底を遊泳しているような、現実から離れてしまったかのような感覚とでも言えようか、オカシナ感じに囚われている。それも夏の仕事をして過ごすうちに次第に調整がついて遠退いていく。

頭の片すみに残る会場で出会った人々との語らいや事々も自然に消化されている。

庭ではアシスタントのYさんが毎年種を採り撒きしているマリーゴールドが、ここそこで咲いている。オレンジの明るさと茶褐色の花びらの取り合わせ、この色彩が、この庭のシーンが好きだ。



東大宮 カフェギャラリー 温々 での展示風景